



木村久夫氏は唯一の生存者として「きけわだつみのこえ」に遺書が載りました。ただ、一部削除された部分があり、加古陽治氏は「真実のわたつみ」でその部分を明らかにされました。

木村先輩は軍国主義と軍隊、とくに陸軍が大嫌いであり「日本の軍人、ことに陸軍の軍人は、私達が予測していた通り、やはり国を滅ぼしたやつであり、全ての虚飾を取り去れば、我欲そのもののほかは何ものでもなかった」と残されました。

いくら戦争の不条理が嫌いでもその当時招集を忌避する術はなく、応召後もせめてもの抵抗として少しでも楽の出来る「幹部候補生」になることを拒否し、上等兵のままインド洋の孤島カーニコバル島で、上官の責任を負わされ、B級戦犯として処刑されました。

18号では「私達にとつての戦争」と題する特集を掲げ、戦争の悲惨な記憶を持つ会員から「二度と戦争はすべきではない」と多数の投稿を頂きました。

19号で21大久保千尋さんが千里山から見えた

「大阪空襲」の思い出を書かれました。

幸い空襲を免れた千里山からも大阪の大火災がよく

見えて、炎に逃げ惑う人々の声が風に乘って届き、大火災の炎で吹き上げられた上昇気流に乗って半焼けになった様々なものが千里山にも降ってきたそうです。小さな長靴が降ってきて、持ち主の子供の運命がどうなったのか心を痛められました。

我々の世代が最後となって、本当の戦争の悲惨さを体験してきました。辰巳経世氏と木村久夫氏、立場は違えど、侵略戦争とファシズムに身をもって反対されたお二人が千里山に縁のあられたことを今一度想い、幸いにも戦争に狩り出されることなく、老境を迎えた私達は、孫やその子の世代が二度と戦場に赴くことが無きことを唯々祈ります。

24回生 奥田 陽一記